

デブリ撤去難題あらわ

福島第一台座の損傷も深刻

核燃料が溶け落ちる「メルトダウン」を起こした東京電力福島第一原発の1、3号機のうち、核燃料の溶融が最も激しいとみられていた1号機。事故から12年が経ち、ようやく原子炉直下の状況が見えてきた。今回の調査を東電は「前進」ととらえるが、溶けた核燃料（燃料デブリ）の取り出しや将来の地震リスクといった難題も突きつけられている。

「内部をちゃんと見ることができ、大きな前進だ。得られた情報をしっかり分析したい」。東電福島第一廃炉推進カンパニーの小野明代表は30日の記者会見でこう強調した。

1号機の燃料デブリは推計880トだが、取り出しに着手できていない。最も早い2023年度後半の開始をめざす2号機でも、まず数センチを取り出し、成分や硬さを分析して徐々に取り出す量を増やす計画だ。1、3号機は開始時期すら決まっていない。

さらに、440トもの巨大な圧力容器を支えているコンクリート製の台座（厚さ約1・2メートル、直径約6メートル）の損傷も深刻だ。今回の調査で撮影した台座の約半周の内壁は全体にわたって、上部でコンクリートが残る一方、下部は鉄筋があらわになっていることが明らかになった。

22年3月に相次いで最大震度6強の地震が発生した。今後も強い揺れに襲われるリスクが懸念される。NPO法人・原子力資料情報室の上沢千尋研究員（原発事故担当）は「地震で台座が倒壊し、圧力容器が落下することが心配だ。落下の衝撃で圧力容器に亀裂が生

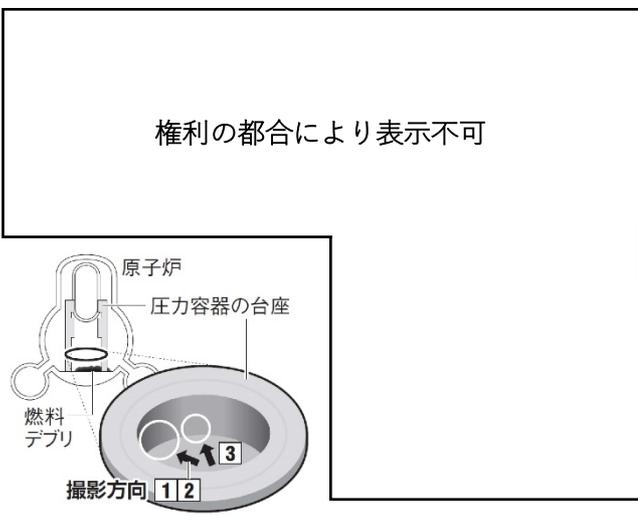
じ、放射性物質が容器外に出る可能性も否定できない」とみる。

東電はこれまで、仮に台座の約4分の1が損傷していても耐震性は十分という解析結果があり、相次ぐ強い地震を経験しても縦方向の鉄筋に大きな変形がないことをあげて「地震で大き

な問題は起こらないだろう」（小野氏）としてきた。圧力容器は台座のほかにも上部で真横から金属で支えているという。東電は、今回のロボット調査の結果をもとに耐震性を評価し直す方針だが、30日の記者会見では耐震性に問題はないと従来の見方を繰り返した。

（福地慶太郎 佐々木凌 山野拓郎）

な問題は起こらないだろう」（小野氏）としてきた。圧力容器は台座のほかにも上部で真横から金属で支えているという。東電は、今回のロボット調査の結果をもとに耐震性を評価し直す方針だが、30日の記者会見では耐震性に問題はないと従来の見方を繰り返した。



な問題は起こらないだろう」（小野氏）としてきた。圧力容器は台座のほかにも上部で真横から金属で支えているという。東電は、今回のロボット調査の結果をもとに耐震性を評価し直す方針だが、30日の記者会見では耐震性に問題はないと従来の見方を繰り返した。

な問題は起こらないだろう」（小野氏）としてきた。圧力容器は台座のほかにも上部で真横から金属で支えているという。東電は、今回のロボット調査の結果をもとに耐震性を評価し直す方針だが、30日の記者会見では耐震性に問題はないと従来の見方を繰り返した。